

2 畑作除草剤の実用化（農試畑作科）

大豆、小豆に対するクサガードの実用化

(1) 背景とねらい

大豆、小豆に対して選択性のある生育期茎葉処理剤を検討した結果、イネ科雑草に対して高い除草効果を示す有望な選択性除草剤が確認されたので参考に供する。

(2) 技 術 内 容

1) 除草剤の種類名と作用性

- ① 除草剤名 クサガード水溶剤（アロキシジン75%水溶剤）
- ② 殺草作用 イネ科雑草の茎葉から吸収され、分裂細胞に作用し、生長点（新葉）から枯死する。
- ③ 適用作物 大豆、小豆

2) 除草剤の使用法

- ① 対象雑草及び使用時期 大豆、小豆の生育期に全面茎葉処理が出来、イネ科雑草のみ枯殺し、広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果がない。一年生イネ科雑草（ヒエ類、メヒシバ類、エノコログサ）の発生後から5葉期（雑草分けつ期、大豆の生育ステージでは初生葉～2葉期頃）までの茎葉処理で効果を発揮し、多年生雑草に対しては効果劣る。
- ② イネ科雑草地帯ではクサガード単用。広葉、イネ科雑草ともに多い地帯は播種後に広葉対象の土壌処理剤（ロロックス等）を使い生育期にクサガード処理の体系利用とする。
- ③ 使 用 量

単用—生育期茎葉処理；クサガード水溶剤 100～150 g/10a、水100ℓに稀釈

体系—播種後土壌処理；広葉雑草に効果の高い土壌処理剤

生育期茎葉処理；クサガード水溶剤 100～150 g/10a

(3) 指導上の留意点

- 1) 周囲にイネ、麦、トウモロコシなどのイネ科作物が隣接する圃場では薬液の飛散に十分注意をする。
- 2) 雑草が枯死するまで約一週間程度の期間がある。
- 3) 薬剤は水に完全に溶かしてから散布する（水溶解度>200 g/100ml 30℃）
- 4) 広葉雑草には効果がないので広葉対象土壌処理剤との体系利用が望ましい。

(4) 試験結果の概要

1) 試験年次 昭51～53

2) 農試本場 農試本場

3) 試験方法 品種；大豆、白目長葉、小豆、岩手大納言

播種期；昭51年6月3日、昭52年6月1日、昭53年5月26日

4) 主要成果の具体的データ

年次	作物	試 験 方 法				除草効果(%)			薬害	作物関係			
		除草剤名	処理法・時期 (月・日)	処理量 g/a	処 理 時 の 雑 草 の 状 態	(残草量対無処理比)				開花期	完全除草対比 (%)		
						イネ科	広葉	統計		(月・日)	主茎長	子実重	
51	大豆	リニユロン→ アロキシジン	土壌(63)→ 茎葉(76)	15→10	イネ科 4～5.5葉	3	5	5	無	8 1	104	98	
		"	"	20→10		2	4	3		"	8 1	109	106
		(比) リニユロン	土壌(63)	20	—	8	15	14	"	8 1	98	94	
52	大豆	リニユロン→ アロキシジン	土壌(64)→ 茎葉(75)	15→10	3～5葉	1	16	11	"	7 29	94	102	
		(比) リニユロン	土壌(64)	20	—	17	9	12		"	7 29	102	99
	小豆	リニユロン→ アロキシジン	土壌(64)→ 茎葉(75)	15→10	2～4葉	1	32	28	"	8 6	107	97	
		"	土壌(64)→ 茎葉(712)	15→10	4～6葉	3	6	6		"	8 6	104	106
		(比) リニユロン	土壌(64)	20	—	20	5	7		"	8 6	100	114
53	小豆	リニユロン→ アロキシジン	土壌(529)→ 茎葉(623)	20→10	2～4葉	1	3	1	"	7 25	104	112	
		"	"	20→15		t	2	1		"	7 25	107	105
		(比) リニユロン	土壌(529)	20	—	26	10	19		"	7 25	105	102
昭51 ～53	無除草平均				g/m ²	286.3	569.8	856.1	—				
					本/m ²	82.7	52.8	135.5					

※ t は trace の意

5) 参考資料 昭51～53 畑作除草剤試験成績書、岩手農試

(5) 残された問題点

残存広葉雑草対策